

ジンギスカン

自動ドアをくぐると外気よりもやや高い室温と湿度を頼で感じる。各席に排煙の設えはあれどそこは週末の夜、内と外の空気の密度が違う。ニンニクダレや、牛肉とは異なる脂を感じさせる匂いが、空きっ腹に誘いをかけた。

黒髭とバーソロミューは席につくやいなやビールを注文した。この店はスタート用のセットがあり、人数分勝手に出てくるシステムなのだ。ガコン、と重い音を立ててカセットコンロの上に専用の鉄鍋が置かれる。ドーム型のそれが熱せられるうちにビールが届き、宴の口火を切った。

鉄鍋が完全に焼ける前に牛脂と、スターターセットが到着。肉の皿を置いた店員を捕まえて、そのまま追加注文だ。店員が端末を開くのを確認して生ラム盛り合わせをN皿、タレ付きの肩ロースを二皿、ラムチョップを四本、ついでにすぐ出る系メニューから目についた順に。

バーソロミューが注文している間に、黒髭は牛脂を鉄鍋に塗り広げ、最初の肉を鍋肌に貼り付けていく。ジュウ、と音がするそばからラムの芳醇な香りがたった。黒髭は焦らず周囲に野菜を敷き詰める。肉を何度も返すのは良くない。縁が白くなるまでは待たなければ。暇つぶしには野菜の方を世話してやればいい。もやしとニラは特にかまってやらないと、勝手に焦げて炭になっていく。

「……」

「……」

鉄鍋に二人分の視線が刺さる。これでも一応はデートなのだが、友人時代も含めれば相当に付き合いの長い二人に、改めて話すような話題もそうそうなかった。そも、無言が苦になるような浅い付き合いでもない。ただじつと焼けていく肉を見つめ、タイミングを見てひっくり返す。バーソロミューは頃合いを見て、タレを準備し出した。自分の小皿にとり、調味料入れを黒髭に渡す。黒髭も自分の皿に入れ、元の場所へ返す。タレの次は塩だ。声をかけなくとも滞ることなく、テンポよく循環していく。

頃合いになったところをそれぞれ皿に取り上げ、口に放り込む。たちまち口内を満たす旨味と香り。すぐさま両方の喉をビールが追っかけた。

「くうんまつ」

「……ッ、うまい」

溢れでた言葉は同時。互いにチラリと視線を合わせるが、それで十分だった。焦げはじめた野菜を救い出しながら、次の肉を焼いていく。

最初に届いた肉が終わる頃、バーソロミューは再度メニューを開いた。最初のページ一番上。店長イチオシのマークを付けられているのは、おろしにんにくをてんこ盛りにした一品。通常のタレにもにんにくは入っているが、更にマシマシになっているものだ。

「生にんにく結構キますよ。この後チューする予定とか、大丈夫ですか？」

店員が少し揶揄う様子を含ませて、バーソロミューへと聞き返した。横目に黒髭と視線が合う。小さな黒目がニヤニヤしているのが、ジョッキ越しにもよく見えた。

「全く問題ないよ」

「ですなあ」

軽く笑って促すと、店員が戻っていく。入れ替わりに別の店員が、追加注文したラムチョップを置いた。鉄鍋の上の肉を避けて、黒髭が骨付きのラムを並べる。その間にバーソロミューは、添えられていたにんにくチップを両方の取皿へ分けていく。

にんにくも、二人で食べれば怖くない。